

反障害通信

23. 10. 18

138 号

愛国心教育という[差別排外主義——エゴイスト養成] 偏向教育の廃止を！

かつて、教育関連法規に「愛国心」という言葉を書き込む法案を上程するときに、「どの国も、愛国心という言葉織り込んでいる」と法案を推進した自民党右派は、叫んでいました。

ことの真偽は分かりませんが、もしそうだとすると、はっきり言えることは、民主主義という概念がそれなりに浸透した 21 世紀になっても、戦争をなくせないのは、まさに、この「愛国心」教育ではないかとわたしには思えるのです。

「アメリカ・ファースト」を唱えるトランプ政権への批判の中でとらえられてきたことは、これは差別排外主義であり、それは、自分ファースト——エゴイズムにつながっていくということです。

自民党右派の政治家がテレビにでて、「最近の若いひとは・・・・・・・・」とそのエゴイズムぶりを嘆いていたりしています。そのエゴイズムをもたらしたのは、まさに自分たちが推進してきた「愛国心教育」だと思えばいいのでしょうか？ きっと、国家主義的な、全体主義的な教育により、「国家のために死ぬる国民の教育を！」ということで、エゴイズムを克服できるとするのでしょうか？ そのような論理の破綻は、そもそも「愛国心」教育の下でも、ますますエゴイズムに凌駕されていることで明らかになっています。

ドイツ・ナチズムの下でも、ファシズムは全体主義とも言われますが、そこでエゴイズムがなくなるわけではなく、むしろエゴイズムにとらわれていったのです（註）。

第二インターナショナルの国際主義の中心であったドイツ社会民主党が、第一次世界大戦の投入時に、いとも簡単に戦時国債に賛成することをもって、国際主義をかなぐり捨て、ナショナリズムにとらわれたことをとらえ返さねばなりません。マルクスは国際主義的なことを貫き、それを引き継ぐとしたレーニンも原則国際主義的でした。ところが、ロシア革命の敗北的狀況の中で、そのレーニンの現実主義は、これは国家資本主義だとする「新経済政策」を導入し、そしてその死によって、スターリンの「一国主義的な社会主義」——それは「社会主義」から逸脱した国家資本主義にすぎないのですが——に道を拓きました。その流れの中で、マルクス・レーニン主義（これはまさにスターリン主義なのですが）を党是とする中国共産党は、マルクスの国家=共同幻想規定をとらえ返せず、スターリン主義的な一国社会主義建設が可能とする論の中で、覇権主義的なことに陥り、自らも「愛国心教育」に陥っています。

日本においても、安倍元首相が、日教組出身の議員に対して、答弁席から「日教組！日教組！」とおおよそ、民主主義的言動とは真逆なヤジを飛ばしているのをニュースで観て、わたしは自民党の「偏向教育を進めている」というかつての日教組批判を想起してしまし

た。歴史修正主義者には、「愛国心教育」が戦争とファシズムの突入の基礎を築いたという反省がないのでしょうか？

今、ウクライナ戦争が勃発して、その収束さえとらえられなくなっています。ですが、そもそも戦争をなくすためには、どうすればいいのか、という基本的な問いに立ち返るときです。

国連で核兵器禁止条約を、第三世界中心で発行したように、軍拡の停止・軍備そのものの縮小と廃止、全ての軍事同盟の廃棄から、「差別排外主義教育の禁止条約」その中身としての「愛国心教育の禁止」を織り込んで締結していくことが必要なのです。それを単に国連の場ということではなくて、むしろ民衆の国際連帯の力で、各国政府に働きかけて、そのような流れを形成していくことが必要なのだと思います。

そのようなことが実際的に運動として成立するか、という批判がでてくることは承知で、少なくともそのような議論を、「愛国心」教育——国家主義批判を進めていくことこそが、今必要なのだと思えるのです。

(註)

たわしの読書メモ・ブログ 615～617 / クラウス・コルドン / 酒寄進一訳『ベルリン三部作』岩波書店(岩波少年文庫)2020 [「反障害通信」131号所収] 参照。

(追記)

この文章を書いたのは一ヶ月以上前です。この編集に入る直前に、ハマスのイスラエル攻撃と、イスラエルのパレスチナへの砲撃・空爆が起き、地上侵攻がおこなわれようとしています。まさに、ここで書いていたことが、大きな問題になっています。編集後記に少し書きますが、次回巻頭言で取り上げます。

(み)

(「反差別原論」への断章) (67) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 138号」アップ(23/10/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページに不備・加筆することがあり、昨年かなり大幅な更新をしました。「今後の課題」など関心をもってもらえる方は、読んでもらえると幸いです。<http://www.taica.info/kaikadai2.pdf>
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」で見れなかったところをチェックして一部修正して再アップしました。今のところ、全部見れるようになっています。「吃音者」当事者団体で活動していた時代の、「個的伝言板」として出していた「ふれあい」のバックナンバーの「金閣寺」関係の文書、後日アップする読書メモの本の関係でまとめて、「反差別資料室 A」にアップしました。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」も、新しい本の購入や読書に合わせて、3月の末に二年ぶりにリアップしました。

読書メモ

今回は、「廣松ノート」の三冊目。『事的世界観への前哨』に入りました。この本は、わたしにとってパラダイム転換論を押さえることで、重要な意味を持った本で、わたしが出した本(三村洋明『反障害原論』世界書院 2010)の中で、その序文を引用しています。その精確な元文を今回起こしました。更にわたしの学習した内容でのパラダイム転換の内容を斜体で書き出しています。それが 635 です。636 として間に挟んだのは、その斜文字で書き出したパラダイム転換論のひとつの、「ユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学への転換」ということを、内容も押さえないで書いていることに、おののいて、付け刃的な学習メモです。で、637 は、再び元本にも戻りました。この本は、『廣松涉著作集』の中で分解して掲載されていて、まとめて論じることの困難性と先を急ぐことなので、後でまとめて論じること、いくつも先送りします。

たわしの読書メモ・・ブログ 635 [廣松ノート (3)]

・廣松涉『事的世界観への前哨 物象化論の認識論的~存在論的位相』勁草書房 1975 (1)

[廣松ノート]三冊目、これは前の『世界の共同主観的存在構造』とセットで語られることが多いのですが、『廣松涉著作集』では分解されて、掲載されています。先に目次をだしておきます。(○囲み数字が『著作集』所収巻数です)

目 次

序 文

第一部 近代哲学の世界了解と陥穽

一 カントと先験的認識論の遺構⑦

第一節 先験的認識論の課題と背景

第二節 先験的演繹論の問題と沿革

第三節 先験的観念論と共同主観性

二 マッハの現相主義と意味形象③

第一節 マッハの哲学的世界観

第二節 マッハ哲学と科学理論

第三節 マッハ哲学のアポリア

三 フッサールと意味的志向の本諦⑦

付 ハイデッガーと物象化的錯視⑦

第二部 物的世界像の問題論的構制③

一 物体的自然像の構制要件

第一節 肢体的分節と物体的分節

第二節 形相的存在と質料的実体

第三節 空間的質料と場所的空間

二 物理学的存在概念の変貌

第一節 古典物理学と機械的自然

第二節 相対性理論と観測の問題

第三節 量子力学と不確定性原理

三 現代物理と物象性の存立

第一節 与件の同一性と間主観性

第二節 対象的所知性と物的实在

第三節 観測の理論と対象的様態

第三部 時間・歴史・人間への視角

一 時間論のためのメモランダ②

第一節 時間論の問題論的構制

第二節 体験的時間の現前様態

第三節 時間形象の対象的存立

二 歴史法則論の問題論的構制①

第一節 問題論的領域の限定

第二節 歴史的法則論の相対性

第三節 歴史法則の存立機制

三 人間論へのプロレゴメナ②

索引

冒頭に書いたようにこの書は『世界の共同主観的存在構造』とセット的に、その後の廣松理論の原型とか端緒的な意味ももっていて、その広袤や壮大さや体系的なことや、またパラダイム転換的な事が、込められていると改めて感じ入っています。

さて、この本は『著作集』でバラバラにされているということで、編集者たちの編集方針を疑問的に思っていたのですが、廣松さんの『世界の共同主観的存在構造』の文庫版の「序文」で、この『事的世界観への前哨』にふれている箇所があります。「……………『事的世界観への前哨』（勁草書房）第Ⅰ部所収のカント論・マッハ論・現象学論・ハイデッガー論はもとより、同書第Ⅲ部の人間論・歴史論・時間論なども、すべて本書（『世界の共同主観的存在構造』）での所説を前梯として敷衍展開したものです……………」3・4Pとあり、これを指示書のようにして分解して掲載したのだと一応理解しました。第一部は、第七巻の「哲学・哲学史論」に入れています。ただ、マッハの章「二 マッハの現相主義と意味形象」に関しては、「第二部 物的世界像の問題論的構制」、つまり「物体——物理論」と一緒に第三巻の「科学哲学」に入っています。これは、マッハの理論がアインシュタインの相対性理論の先駆けとなり、それが量子力学として拓いていった経過があり、廣松さんの論考が、この物理学のパラダイム転換におけるマッハの位置を押さえたところで、ここに入れたのだと思えます。そもそも「第二部 物的世界像の問題論的構制」は、「物的世界観から事的世界観へ」と題する『思想』連載論文の内、第一・二回分と他の論文を合わせて編集したものを『世界の共同主観的存在構造』Ⅱ「一 共同主観性存在論的基礎」として掲載し、第三・四・五回分がこの『事的世界観への前哨』の第二部になっています。で、第一部の「二 マッハの現相主義と意味形象」とこの第二部は、『科学の危機と認識論』

と一緒に第三巻に収められています。ですので、第二部は、第三巻所収の『科学の危機と認識論』を再読した時に（そこまで行けるかという問題があるのですが）、第三巻総体として読書メモをあらためて書くこととして、ここではパスします。で、この第三巻の後半部分を読んで、マッハ論のわたしのメモを残しているのです、今回の読書メモの最後に[資料①]として掲載しておきます。（なお、赤字になっているところは今回転載するにあたって、校正をいれた箇所です。）

さて、目次に合わせて、各部と章について、コメントしていきたいのですが、この本は『著作集』でバラバラにされているので、その『著作集』に沿って改めてまとめる作業をすることにして、とりあえず、簡単にメモを残します。

序 文

この序文には、わたしの本の中で紹介したパラダイム転換に関する文があります。省略形で引用していたので、もう少し前からですが、精確に全文出しておきます。

著者が先学の正負の遺産に定位して模索を続けてきたのは「事的世界観」とでも呼ぶうる観方に照応する新しい世界観了解の構図と枠組みである。それは、認識論的な射影においては従前の「主観—客観」図式に代えて四肢構造の範式となって現われ、存在論的な射影においては、対象界における「実体の第一次性」の了解に代えて「関係の第一次性」の対自化となって現われる。（これは論理の次元でいうならば、同一性を原基的とみる想定に対して差異性を根源的範疇に据えることを意味し、また成素的複合型に対して函数的関連型の構制を立てる存在観となり、因果論的説明原理に対して相作論的記述原理を立てる所以となるが、ここでは詳しく立ち入るには及ぶまい。）認識論的射影における間主観的四肢構造といっても所謂存在関係がそこに含まれ、存在論的射影における関係の第一次性といっても所謂認識関係がそこに含まれることは附記するまでもない。が、事的世界観の本諦はかかる射影——これはあくまで哲学的伝統と関連づけて講述するための便宜にすぎない——の原姿であって、そこにおいては、いわゆる存在論的・認識論的・論理学的諸契機が統一態をなしている。

（廣松渉『事的世界観への前哨—物象化論の認識論的～存在論的位相』勁草書房1975年「序文」ii P）

これに加えて、別のところや、廣松シェーレのひとたちが出している論攷も加えて、わたしなりにだしておくと、

これは、因果論という線形的な函数に代えて非線形的な函数を描くことになる、言い換えれば、錯分子的・入れ小型の構造や函数内函数ということへの転換を意味する。この転換は、冒頭に書いた認識論における転換のみならず、物理学におけるニュートン力学から量子力学への転換、数学におけるユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学への転換、障害学における医学モデルから（「社会モデル」を経て、）関係モデルへの転換などなど、あらゆる学におけるパラダイム転換を意味している。

さて、これはこの『事的世界観への前哨』をわたしがパラダイム転換を論じた書として押さえていた所以で、実際第二部は、「物的世界観から事的世界観へ」として『思想』に連載されたことで、まさにパラダイム転換の内容なのです。

第一部 近代哲学の世界了解と陥穽

第一部は、カント、マッハ、フッサール、ハイデッガーを取り上げています。

ここでは余り深く踏み入りません。「二 マッハの現相主義と意味形象」のマッハ論は、第二部と一緒に三巻ですが、他は第七巻「哲学・哲学史」所収で、カント、ヘーゲル、現象学（フッサール、ハイデッガー、メルロ・ボンティ）と一緒に展開しています。

一 カントと先験的認識論の遺構⑦

カントに関しては、廣松さんの修士論文は「カントの「先験的演繹論」で、かなりカントにのめり込んでいます。しかし、この修士論文は著作集に入っていない。どうやら、三項図式を超え得る可能性を見ていたようなのですが、結局、「ただのカント研究」として、余り自分の中で結节点的な論攷とはなっていないようなのです。カントの先験的観念論を共同主観性論として読み解いて、物自体論を三項図式（意識対象—意識内容—意識作用）批判として、四肢構造論としてアポリアを解く道を示したと言いえるのでしょうか。『世界の共同主観的存在構造』の読書メモから、カントの先験的観念論を批判した部分の引用をしておきます（なお「意味の所知」は、廣松さんの未完の著『存在と意味』では「意味の所識」になっています。また「役割」と「役柄」の使い分けが未分、というより演劇論から発していたところで「役柄」概念を使用していたという指摘も継続しています。後に社会学的文脈では、役割概念が主として使われるようになっていきます）。

「認識論に謂うところの「先験的主観性」とはとりもなおさず認識論的主観性」であるわけだが、この認識論的主観性は、われわれの見解では、アプリアに成立する「意味の所知性」の間主観的同型性に照応するものであること、——因みに、謂うところの意味の所知性は、認識論的構成主義の構図に即していえば、フェノメナルな対象の相在を構成的に規定する“先験的形式”なのであって——認識主観が認識論的主観としての機能を賦与される所以のものは、まさしくこの“先験的構成形式”の同型性の共同主観的形成に存するという、この意味において「先験的主観性とは共同主観性」である。所知の側に即していえば、世界像、すなわち、認識論的主観としての認識主観による対象的“構成”の所産は、当の“構成形式”＝「意味の所知性」が間主観的な形成態であるそのかぎりにおいて、且つそのかぎりにおいてのみ、共同主観的構成の所産であり、共同主観的に同型的な相で存立する。ところで、当の、“構成形式”の共同主観的な協働的形成ならびに対象的与件の実践的開示は、歴史的・社会的に制約されており、この被制約性のゆえに、世界像は歴史的・社会的に相対的である。ここでは、とりあえず、われわれの基本的な存在論的了解の構えを示唆し、それに対して予想される存在論上・認識論上の「独我論的疑惑」を防遏しつつ、認識主観ならびに世界観の共同主観性の存立を権利づけるべく *Grundverfassung*（基礎状態）を提示したところで、一旦筆を擱くことにしたい。」203-4P

二 マッハの現相主義と意味形象③

マッハに関しては、前述しています。この章と、「第二部 物的世界像の問題論的構制」は『著作集』第三巻「科学哲学」に収められていて、その中に『科学の危機と認識論』、『相対性理論の哲学』もあり、物理学にも関心の深かった廣松さんが、量子力学的なことや、

空間と質量というところでの電磁場論的なことを押さえた、実体主義批判の展開が出てきます。ここのところ、基礎学習からの再学習の必要性を感じているのですが、そのひとつにアインシュタインの「相対性理論」と量子力学があります。どこまでできるか、むしろ否定的な暗雲が立ちこめているのですが、これらもセットにして後日の課題にします（後日があればです）。

三 フッサールと意味的志向の本諦⑦

フッサールは、廣松さんを現象学者ととらえるひとも出ています。フッサールが使った「共同主観」「間主観」ということばを廣松さんも使っているゆえですが、しかし、廣松さんは、現象学派は結局三項図式を超えていないとして批判しています。フッサールに関しては、『現代思想』に連載された「社会行為論ノート」1986-9で、後に『フッサール現象学への視角』（第七巻所収）として単行本化された本があります。それとセットにしてまとめたいので、これも後日の課題にします（後日があればです、以下同文）。

付 ハイデッガーと物象化的錯視⑦

ハイデッガーは廣松さんが「用在」という概念を折に触れて引用しています。ただし、ハイデッガーについてのまとまった論攷は、この論攷以外にわたしは見出していません。また、「用在」という概念は廣松さんの「それ以上の或るもの」、「それ以外の或るもの」ということにもリンクしていきます。また、ハイデッガーの「ダスマン」という概念と廣松さんの四肢構造論のうちの、「或る者」jemandという概念とリンクしていきます。ただし、「ダスマン」は物象化されていて、それがハイデッガーの全体主義へ飲み込まれていく契機になっているのではないかというわたしの想起のようなことがあります。

第二部 物的世界像の問題論的構制③

これは、前述したように『著作集』第三巻でまとめます。

第三部 時間・歴史・人間への視角

これは、他の論攷とはあまり重なっていません、かなりの特筆すべき論攷のかたまりになっています。ここでまとめます。ただ、かなり長くなっているので、次回に回します。

なお、この『事的世界観への前哨』には文庫版があり、野家さんが解説を書いています。また各章は『著作集』に収められているので、その解説が4巻分、また『著作集』発刊に際して「月報」が付いていますので、それについてもコメントを書く予定です。（結局「月報」は、とりたてて重要性があるものは別にして、『著作集』の読み込みに際に廻します。）

[資料①]

たわしの読書メモ・・ブログ 529

・廣松渉『廣松渉著作集3「科学哲学」』岩波書店 1997

レーニンの「唯物論と経験批判論」のマッハ批判を読んでいて、マッハ理解をするためにマッハに関する廣松さんの文があるので、表題の著作集の中のマッハに関する論攷を中心に再読しました。丁度、後半部分 417-592P にあたります。途中でやはり、この巻の最初

から読んでいくこと、さらにマッハの本そのものの読書、さらには物理学の学習の必要も感じていました。ですが、とてもそこまでは掘り下げられません。わたしの人生の最後の方で、「廣松ノート」を作るつもりです。その中で、この3巻の最初から読み直し、ノートを残したいと思っています。わたしは、この著作集が出たとき、予約販売で、確か月一ペースで発刊されて、その中の未読の文、解説だけを読んでいきました。その他のところは、単行本ででたとき、また元文の雑誌連載中にほとんど読んでいました。

今回再読した論攷を挙げておきます。

III. 「相対性理論の哲学」の中の「第二章 マッハの哲学と相対性理論」

これは、「第一章 相対性理論の哲学的次元」を先に再読することでした。明らかに失敗です。ですが、そもそも物理学の基礎知識のようなこともないと、読み飛ばしになります。以前単行本で読んだときも、そのようなところで読んだのです。認識論的なところにつなげる、ところで物理的なところの表面をなぞる、結局、そこに行き着くのですが。

IV. 「マッハの哲学——紹介と解説に代えて」「マッハの**現相主義**と意味形象」「マッハとわたし」「哲学の功德——マッハ外伝」「マッハ主義」

解説 野家啓一

解題 小林昌人

さて、そもそもマッハに踏み入ったのは、マッハの何が問題になっているのかということです。それは、ひとつ前の読書メモ（たわしの読書メモ・ブログ 528 / ・レーニン「唯物論と経験批判論」（『レーニン 10 巻選集 別巻 2—レーニン生誕 100 年記念』大月書店 1966 所収）で先取的に少し書いたのですが、わたしが影響を受けた廣松さんがマッハからの影響も受けて、物理学を専攻しようとしていたことがあります。そして、廣松さんの論攷にマッハの影響もとらえられます。そのあたりを少し押さえてみます。

マッハの人物辞典的解説は 526P に書かれています。全面的に書き写したい心境に駆られますが、禁欲しておきます。

マッハの研究は多岐にわたります。わたしが留意したのは、ゲシュタルト心理学の先駆をなした 538P ということや、諸要素の函数連関 536P ということなど、それでも主なフィールドは物理学と言えるようです。マッハは、ニュートン力学の絶対空間、絶対時間という概念を、観測者の問題から批判していき、相対性理論を生み出したアインシュタインが、真空の中での光速が一定であるという実験がマッハの若いときに出ていたら、マッハが相対性理論を生み出したであろうということを書いています。

わたしはマッハの認識論を問題にしているので、そこにしぼります。

近代哲学は、中世の神というところからの演繹から、デカルトの精神と物質、精神と肉体の二元論に陥り、そこから、意識作用——意識内容——意識対象という三項図式ということが生まれ、いかにして認識は可能なのかという問題が生じてきました。そういう中で、不可知論が生まれてきます。それは一つは、カントの物自体論です。もうひとつは、ヒュームの懐疑論です。そういう中で不可知論を退け、マッハは要素一元論ということを突き出します。マッハが想定していたのは、主客未分な、生まれたばかりの赤ん坊のとらえる世界です。529P それは、結局、三項図式でのアポリア(論難)は解決しえていません。それは、結局、マッハの図式で言えば「要素 ABC……を他人ともそのまま共有化する与件と

みなすことにおいて、マッハとしては、実は単なる感性的要素としてではなく、共同主観的に同一なものとして先行的了解される意味形象として措定してしまっているということである。」545P、これは、結局「付け足して考える」(ヒンツデーデンケン)512P・532P ということが、意識対象としたことにはおよばない図式になっています。「マッハは、認識主観の本質的な同型性を暗黙の前提にしてしまっている。」549P という他我問題が解決できていないこととならんで、この「付け足して考える」(ヒンツデーデンケン)ということ、廣松さんは、「それ以上のもの」——「それ以外のもの」として、マッハが押さえ損なっている他我問題も押さえたところで、四肢構造論として突き出しています。

三項図式の論難を解決しようとしてしたひとつの流れ、フッサールの現象学は、本質直感として解決しようとしていたのですが、結局失敗しています。547-8P「フッサールが特殊な直感の対象として考えたところの契機、広義の「意味的諸契機」は、物象化的錯視であることを指摘しなければならない。」548P と廣松さんは指摘しています。

マッハの認識論に関する廣松さんの要約的なところ「近代哲学のかの二元論的構図と主客図式とを内在的に批判する構えに一応はなっているけれども、感性的「要素」の超個人的・超歴史的な実体化、認識主体のアプリオリな同型化、この両極の中項として $\alpha\beta\gamma\cdots$ すなわち意識内容としての表象を立てる構図になっており、本質的には近代哲学の地平を超出していない。けだし、マッハの哲学が、近代哲学に対する即時的な自己批判の構えになっている限りでは真摯な再評価と再検討に値するとはいえ、所詮は抜本的止揚の一与件たるにすぎないと評さるべき所以である……」549P

マッハが廣松さんとリンクしているところでわたしが留意しているのは、「付け足して考える」(ヒンツデーデンケン)と函数的連関という関係主義的とらえ返しではないかと押さえています。

この著作集では、『事的世界観への前哨』を分割して内容的に各巻に割り振っています。この3巻に「Ⅱ. 物的世界観の問題論的構成」(今回再読せず)と「マッハの**現相主義**と**意味形象**」が掲載されています。この本は廣松さんの道行きの大切な過程で、編集者の廣松シェーレのひとたちの分割したことの意図がちょっとつかめないうです。

マッハへの廣松さんへの思いのようなこと「マッハとわたし」「哲学の功德——マッハ外伝」「マッハ主義」に書かれています。ここでは、レーニンの「唯物論と経験批判論」をとらえ返すという学習からマッハに関する論攷を再読したところ、コメントを省きますが、ただひとつだけ気になったところ、廣松さんがマッハを読んで「もはや狂(ママ)信的な「マルクス・レーニン主義者ではありえなくなっていた。」552P と書いているところ、結局廣松さんは、哲学的なところでレーニンの批判はしても、その批判は根底的な、運動論的な「マルクス—レーニン主義」批判までおよんでいないように思われるのです。もうひとつ、廣松さんは、マッハにかなりのめり込んでいて、マッハ主義者というような規定も受けていたようなのですが、自分は決してマッハ主義者ではないと書いていること、むしろ現象学の方に近いというようなことを書いています。ただ、廣松さんを「現象学」の枠内でとらえようという論攷も見たのですが、フッサール批判の論攷を見ていると、これも違うのではないかと押さえるのです。

さて、最後の処、野家啓一さんの解説は秀逸で、これを読むだけで、この本の内容の概

略はつかめます。今回の読書で落としている、廣松さんの量子力学との対話を押さえてくれているところ、改めて、忘れていたことを思い出していました。また小林昌人さんは廣松さんの文献的研究に身を投じていて、また編集的などところで力を発揮しているひと、廣松学とでもいうところで、学究していくひとたちのにとって貴重な存在、導き手です。

最初に書いたように、廣松ノートを作る予定です。廣松さんは膨大な知識の上に論攷を進めています。わたしは廣松さんが引用しているひとたちの原典もほとんど読めないまま表面的にかじっているだけ、そのようなところは、学的なこととして許されることではないのですが、ただ、廣松さんの本を手にするきっかけになればとメモを残しました。

[資料②]

・廣松渉『カントの「先驗的演繹論」』（世界書院）[「反障害通信」17号所収]

一部は廣松の修士論文を松井賢太郎さんが編集したもの。二部には編者の松井賢太郎さんが聞き手になってカント学者の牧野英二さんとの対談、同じく野家啓一さんとの対談と続き、松井賢太郎さんの廣松論文を軸にした論文が掲載されています。

この廣松さんの修士論文は廣松著作集にも、それからその後に出された『廣松渉コレクション』（情況出版）にも掲載されていません。なぜ掲載されなかったのかの問題もあります。廣松さん自身のカント評価はかなり変遷しています。この修士論文では最大限の評価をしていた時ととらえられます。このあたりは、修士論文を通すための戦略のようなこともあったようなのですが、兎も角カントは三項図式を超えていたとかいう評価をしていた時期のようです。廣松はマルクスの『資本論』にみられる物象化論に実体主義批判をなしえるパラダイム転換をなしえていたというとらえ方をして、その物象化論を廣松物象化論といわれるところまで展開させたのですが、それと類比しえるように、カントの『純粹理性批判』の先驗的演繹論の中に、三項図式を超える共同主観性論を読み込み、廣松共同主観性論に繋げて行ったと言ええるのではと思っています。後に廣松さんはこの修士論文を「ただのカント研究」と称し、むしろカントは三項図式を超えていないという批判に至りついたようです。

編集者の松井さんは廣松さんから直接指導を受けていない世代での廣松シェーレというか、廣松研究者。牧野さんとの対談は、牧野さんと廣松さんとのズレを感じていました。野家さんとの対談は面白く、科学史からの哲学との対話あたりのことはすごく参考になりました。松井さんの論文は、それなりに面白かったのですが、わたしの中から廣松さんのカント評価の文の記憶が消えているので、改めて読み直した際にもう一度この論文も読んでみようと思っていますが、廣松さんがカントから離れていったのを、廣松さんを読み違え、強引にカントに引き戻そうとしているのではないかとの思いを持っていました。兎も角もう一度廣松さんの本を読み直す作業の必要性を感じていました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 636

・寺阪英孝『非ユークリッド幾何学の世界 新装版 幾何学の原点をさぐる』講談社 2014

ウィキペディアで「ユークリッド」で検索をかけると、項目自体を「エウクレイデス」に変えて以下の文が出て来ます。

アレクサンドリアのエウクレイデス (古代ギリシャ語: Εὐκλείδης, Eukleídes、ラテン語: Euclīdēs、英語: Euclid (ユークリッド)、紀元前 3 世紀?) は、古代エジプトのギリシャ系数学者、天文学者とされる。数学史上の重要な著作の 1 つ『原論』(ユークリッド原論)の著者であり、「幾何学の父」と称される。

わたしは忘れるのが特技で、ユークリッドの名を何時初めて聞いたのか覚えていません。ただ、その公理と言われることは、小学生の算数くらいから出ていたのではないのでしょうか？ 勿論、『原論』に沿った学習などはなしで、断片的な公理といわれていることを記憶するという学習で、ユークリッドの名自体の記憶も定かではありません。

何で今頃、こんな本を引っ張り出してきたのかというと、微分積分の思い出し学習をして、数学的な基礎がわたしの中で消失していたことを痛感していたところ、パラダイム転換論の中の定式のひとつとして、「ユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学へ」ということがあり、その引用をしているところで、いくら何でも基礎中の基礎的内容を全くつかめなくて、そんな引用もできない、という思いに駆られたのです。

で、図書館でこの本を借りてきました。

最初に目次を挙げておきます。(引用者がかなり編集しています。下線は原文傍点)

も く じ

はじめに

第 1 部 ユークリッド幾何から非ユークリッド幾何へ

- 1 平行線はどう見えるか
- 2 ユークリッドの『原論』を見る
- 3 平行線とは何か
- 4 非ユークリッド幾何への接近
- 5 非ユークリッド幾何のモデル

第 2 部 非ユークリッド幾何の発見

- 1 碩学ルジャンドルの功績
- 2 数学の王者ガウス
- 3 ガウスと W・ボヤイとの出会い
- 4 ガウスの非ユークリッド幾何
- 5 ガウスの記録
- 6 悲運な父子 W・ボヤイと J・ボヤイ
ボヤイ父子とガウス／父ボヤイの驚き
- 7 J・ボヤイついに非ユークリッド幾何を発見
- 8 最初の非ユークリッド幾何の発見者ロバチェフスキー
虚の幾何／謎解き
- 9 非ユークリッド幾何の普及
リーマンの出現／クラインとモデル

第 3 部 非ユークリッド幾何のモデル

- 1 まず球面に馴れよう

2 モデルを半球の上に作る

平面 S と直線(VU) / 鏡映 / 合同変換 / 線分の長さ / 円 / 合同変換と非ユークリッド幾何 / 楕円幾何 / 三種の幾何

付録

- 補講 1 サッケーリ・ルジャンドルの二定理
- 補講 2 トレミー
- 補講 3 円の内部に非ユークリッド幾何のモデルを作る
- 補講 4 角と複比
- 補講 5 三角形の内角の和、多角形の面積
- 補講 6 平行線角の計算
- 補講 7 直角三角形の三辺間の関係
- 補講 8 局面 S^+ 上の微分幾何と円周の長さ
- 補講 9 ガラスの塊三個を摺り合わせて平面が作れるか

あとがき

新装版に寄せて 秋山 仁

参考文献

わたしは知的好奇心で、改めて幾何学を学ぼうという意志が湧いているわけではないのです。もし、昔に戻って学習計画がつかれるとしたら、これもやりたいことのひとつに入れうるのかも知れませんが、膨大な学習すべき課題を抱える中で、時間がない時間がないと何を学ばないで済ませるか、という切り捨てを進めているので、これはここで済ませるしかないのです。

さて、「はじめに」の冒頭で、パラダイム転換という処のわたしの課題とリンクすることが書かれています。

「直線外の一点を通過してこれと平行な直線は、ただ一本しか引けない、というのが昔からある普通の幾何、ユークリッド幾何である。ところがこの幾何のほかに、平行線が一本だけでなく、二本引けるのだ、という不思議な非ユークリッド幾何というものも存在することが、一九世紀の中頃に発見されて、センセーションをまき起こした。こんな不合理なことが数学ともあろうものに起こっていいものだろうか、と。／というわけで、アインシュタインの一般相対性理論のおかげで一躍ポピュラーになったこの非ユークリッド幾何は、今日でもその不思議さは一向になくなっていない。それもそのはず、不思議なことや変なことだったら、ユークリッド幾何にいくらでもあるからで、これが幾何の魅力の一つでもある。」5P・・・アインシュタインはニュートン力学から量子力学へのパラダイム転換の過渡に位置していたひとで、アインシュタインは非ユークリッド幾何学の登場がなかったら、自分の「相対性理論」は生まれなかったと書いているようです。アインシュタインはマッハの理論にも同じような位置づけをしているのですが。

いくつかの、興味深い内容をほんの幾つかの切り抜きメモとして残して置きます。

「直線外の点を通ってこれと平行な直線が、ただ一つ引けるということは／(i)ユークリッ

ド曰く、公準、すなわち仮定にすぎない——公理主義派／(ii)曰く、当然である、ただ残念なことに証明は見つかっていない——確信派／(iii)曰く、あやしいフシもある——懷疑派」52P・・・この分類は他のことでも起きていることで、方法論的に使えること

「つまり狭い場所ばかり見ているとユークリッドが自然だが、目を無限の遠方まで向けて広く見ると、ユークリッド的でない、非ユークリッドの方が自然だというわけだね。宇宙もせいぜい太陽系辺りまでだとニュートンやカントが考えていたようにユークリッド幾何で間に合うが、銀河系、いや我々の銀河系より遙かに遠い空間を研究するときには、非ユークリッド的にならざるを得ないのかも知れない。」61P

「クラインは非ユークリッド幾何のモデルを作ったときの経験から、いろいろな幾何の違いというのは、ただ平行線が一本引けるとか引けないとかいう個々の図形的の違いでない。もっと一般的に幾何を考えるときに当然出てくる平行移動だとか回転だとかいう運動、即ち空間の変換群こそが幾何の違いを認める「決め手」であることを見てとって、それをエルランゲン・プログラムにまとめたわけだ。」156P

「四個の実数の組 (X_1, X_2, X_3, X_4) を点と名づけ、これらのすべての点の集合を四次元空間 E^4 と名づけ E^4 の中の三次元的球面を S^3 を $X_1^2 + X_2^2 + X_3^2 + X_4^2 = \gamma^2$

で、定義して議論をすると、四次元空間の中に、リーマン的の非ユークリッド的立体幾何学が数学的には立派に作れる。これが実は現実の空間であり、幾何であるかもしれないのである。／現実の空間がどんなものであるかなど、人間にはなかなかわかりそうもないが、ひとが発見した数字という、極めて簡単な精密な武器を基にして、幾分でも自然現象の解明を心がけるといふのは、我々人間の一つの大きな生き甲斐ではないだろうか。」246P

この本は、「老生」と「A君」との対話方式で進む非ユークリッド幾何学の入門書のような本です。わたしには、なかなかこの一冊で理解はむずかしいのですが、非ユークリッド幾何学を生み出した、人物の登場と、そのひとの人生などの話もあり、かなり面白く読めました。ユークリッド幾何学が抱えたアポリア的問いの等距離の平行線はひとつなのか、があり、そこでの議論の話が出てきます。そのユークリッド幾何学は平面上の理論ですが、地球は球体としてとらえると、そこで直線を描くと曲線になるということがあり、そのような一例からも、非ユークリッド幾何学が生まれてくるのです。そこには非ユークリッド幾何がユークリッド幾何を包含するというようなこともあり、アインシュタインがまさに、非ユークリッド幾何の登場がなければ、自分の相対性理論はなかったと言っていること、アインシュタインの相対性理論から量子力学が生まれてきたことも含めて、まさに、パラダイム転換なのです。

たわしの読書メモ・・・ブログ 637 [廣松ノート (3)]

・廣松渉『事的世界観への前哨 物象化論の認識論的~存在論的位相』勁草書房 1975 (2)

[廣松ノート]三冊目の(2)、『事的世界観への前哨』、これは前の『世界の共同主観的存在構造』とセットで語られることが多いのですが、『廣松渉著作集』では分解されて、掲載

されていることを 635 の「(1)」で書きました。それで、先を急ぐので、第一部と第二部は、その著作集の各巻ごとの「廣松ノート」を作るときに纏めることにして、とりあえず、過去に取った関連するメモを掲載して、「お茶を濁して」おきました(笑い)。で、第三部は、『著作集』でも、各表題の『著作集』の表題の中に入れ込んでありますが、余り、その表題にそぐわないとか、独立性を持っています。ですから、これに関しては、ここで読書メモを書いておきます。その分の目次をだしておきます。(○囲み数字が『著作集』所収巻数です)

目 次

第三部 時間・歴史・人間への視角

一 時間論のためのメモランダ②

第一節 時間論の問題論的構制

第二節 体験的時間の現前様態

第三節 時間形象の対象的存立

二 歴史法則論の問題論的構制①

第一節 問題論的領域の限定

第二節 歴史的法則論の相対性

第三節 歴史法則の存立機制

三 人間論へのプロレゴメナ②

切り抜きメモです。

第三部 時間・歴史・人間への視角

(裏窓)「第三部には、事的世界観の講述にとって前梯的要件となる論域のうち、時間論、歴史論、人間論に関わる基礎的な視座を表明した三つの論稿を収める。」232P

一 時間論のためのメモランダ

(この章の問題設定)「時間というものをいかなるものとして了解するかは「世界観」の総体と相即的に関わっている。それゆえ“近代的”世界観の全般的超克が課題となっている今日、時間概念の抜本的再検討が要件をなすことが改めて言を俟たない。」233P

第一節 時間論の問題論的構制

(この節の問題設定)「“近代人”の意識においては、時間なるものは直線で対象され、この直線的時間は、しかも、過去から未来の方向へ流れるものと了解されている。このような時間表象は、しかし、近代人にとってこそ“常識”であるにしても、文化諸民族に汎通的な時間表象ではない。それは、必ずしも特殊“近代”ヨーロッパ的とは言わぬまでも、文化史的には多分に特異な時間観念である。／われわれはまず時間観念を歴史的に相対化しつつ、時間論の問題論的構制(「プロブレマティック」のルビ)を再確認作業から始めよう。」

233P

[一]

(この項の問題設定)「狩猟民族や農耕民族においては、一般に、時間は周期的に循環するも

のと了解され、剩え、それは未来の方から到来して過去の方へと推転していくものと考えられている由である。ここではアリストテレスでさえ「円運動こそが時間の最も正確なアナロジー(類比)を表わす」と書いていることなど、文献的資料を詳しく持出すには及ばないであろう。」234P

「われわれとしては、とりあえず以上のところから、世界の時間の表象にかかわる三つの類型を形象化しておくことができる。第一は、世界が時につれてさながら廻り舞台のように次々と到来的に眼前に展らけつつ過去へと推転していくという了解のタイプ出会う、(ここでは認識主観は謂うなれば観望者的に廻り舞台を眺めている)、われわれはこの類型を「狩猟民型」と呼ぶことにしよう。——断るまでもなく、歴史的事実の問題として、狩猟民族が一般にこのような時間的表象をいさぐという謂いではない。これはあくまで命名上の便宜である——。第二は、眼前の世界に未来から時間が来臨しこの時間が経行するにつれて、世界に事象的变化が生ずるといふ了解のタイプであって(ここでは認識主観は謂うなれば空間的世界に内在しており、この静止的視座の前を時間が通過していく)、われわれはこの類型を「農耕民型」呼ぶことにしよう。第三は、敷設された路線ともいべき相で時間が存在しておりこの路線に沿って世界が進行していくにつれて世界の内部的状態に変化が現出するといふ了解のタイプ(ここでは認識主観は事象的世界に内在ないし雁行しつつ時間路線上を謂うなれば自變的世界と共に進行していく)、この類型を「遊牧民型」と呼ぶことにしたい。」236-7P・・・[二] で「旅商人型」追加

[二]

(この項の問題設定)「ところで、いわゆる近代的(自然科学的)時間概念であるが、ニュートンの表現で言えば「絶対的な真の時間は、ひとりでの、いかなる外的なものとの関係もないしに、一様に流れる。」237P・・・線形の、因果論的世界観

「・・・・・・・・時間という河は上流(過去)から下流(未来)へと悠久に流れており、われわれ認識主体は謂うなれば小舟を浮かべて、この時間流に乗っている。流れ進むにつれて、眼前に展らける世界(河岸の景観)が移ろっていく。今眼前にあるものが次の瞬間には背後(過去)に移行し、われわれは時々刻々、新しい世界現相と出会う。それはさながら、旅商人が、かつて泊った町々の追憶をとどめつつも、日々新しい町へと歩みを進め、次々と新しい世界に出会うといふのと類比的である。われわれはこの世界=時間の表象を「旅商人型」と呼ぶことにしよう。時間そのものの表象が「農耕民型」においては「主宰者的」、「遊牧民型」においては「路線的」と形象化されるのに対して、ここでは、それは河流的ないし「流線的」である。」238P

「・・・・・・・・ニュートン・古典理学的な世界時間の在り方は、構図上は「遊牧民型」に帰趨する。／こうして、ニュートン的な体系においては、絶対時間軸という路線を絶対空間的宇宙という畜群が進行するといふ構図になっており、そこでは時間が流れるのではなく、実は、ニュートンの思惑に反して、絶対的空間が流れるといふのが実態である。(上述しておいた通り、もし時間がながれるとすれば、それは「農耕民型」に準ずる仕方で、未来から過去へと流れるのでなければならぬ)。かくして、時間は過去から未来へは流れない。過去から未来へと進行するのは、認識主観を内存在せしめている空間的世界そのものである。」239P

[三]

「このような議論では、しかし、時間論の真の問題点が覆い隠されてしまう。臆言を憚らずに記せば、時間論の真のプロブレマティック(問題構制)をなすところのものは、中枢的には、いわゆる過去(および未来)の世界といわゆる現在の世界との相関性の構造である。／われわれの日常的思念においては、過去(の世界)は端的に無だとはみなされない。それは何らかの意味で存在するものと了解されている。日常的思念では、しかも存在するものは必ず一定の空間的場所の大枠内のどこかに在るものと考えられがちである。ここにおいて、過去の世界は独自の空間的場所において存立するのか、それでも過去の世界といえどもそれが存立するのはあくまで現在の世界のこの場所においてであるか、この二者択一が迫られることになる。しかるに、われわれの日常的思念は、或る時には前者の仕方、或る時には後者の仕方で考えるという二義的な態度をとる。……この二義性から、近代人においても、「旅商人型」の世界時間表象と「遊牧民型」の世界時間表象との二重性が日常的に現われる。／この二重性を論理構制のうで解消することは比較的容易である。このためには、実体的持続性ということを端的に否認して「過去はもはや存在せず、未来はまだ存在せず」という現在主義に徹すればよい。事態を見易くする一具として、テレビのスクリーンを世界空間になぞらえよう。……すなわち、世界は現在(各瞬間ごとに)かくのごとく存在するという事実をありのままに受納しようという立場に立つ場合には、ことさらに造物主を持出す必要は生じない。それゆえ、理屈の上では、このたぐいの徹底した「現在」主義は決して不合理ではない。／しからば、われわれは、現在主義に徹し、過去・未来とは記憶・予期にすぎずと言い、総じて「時間」なるものは全く主観的な幻影にすぎないと言って済ませるべきであろうか？ 拙速な結論は慎まなければならない。われわれとしては、そもそも謂うところの「現在」とは何かを問い返さねばならないし、過去(未来)の世界を現在の世界空間から分離したりそれと二重写しにしたりというかの二義的態度が生ずる所以の“時間体験”の存立構造を分析する必要がある。そのうえで、われわれは、あらためて「狩猟民型」「農耕民型」「遊牧民型」「旅商人型」の世界時間表象、さらには、デカルト的、ベルグソンの、ハイデッガー的、サルトル的、その他の時間概念、これらの形象化が如何にして存立しえたかという問題に討究の歩を進めようであろう。」 240-2P

第二節 体験的時間の現前様態

(この節の問題設定)「前節では、行論のための前梯的拠点の敷設を図り、「対象化された時間」に即して論考したのであったが、本節では「覚識される時間」に定位して論点を固めて行こう。」 242P・・・時間があつて過現未があるのではなく、変化・運動概念的なところから、時間という物象化が生まれ、過現未意識も生まれる。

[一]

(この項の問題設定)「われわれは、まず、“心理的現在”に眼を向け、時間的先後の布置、持続、間合い、の即自的な意識に留目しよう。」 243

「こうして、われわれは、心理的現在において覚識される“時間的”ゲシュタルトないしその知覚において——空間的知覚における布置・延長・距離と併行的に——時間的布置(先後関係)、時間的延長(持続の大きさ)、時間的距離(間合い)が弁別的に現識されるということをフェノメナルな事実として立言することができる。」 244P

「・・・・・・・・そもそも、われわれの現実的知覚において与えられるのは、その都度の感性的与件内容で充実されたゲシュタルトなのであって、布置そのもの、持続そのもの、といった規定性が自存的に抽離されたかたちでフェノメナルに現前することはない。当面の議論にとっては、いわゆる時間的ゲシュタルトの異相性が即自的な現在の意識において覚知されうるということ、そして、当の異相性が反省的には「時間的先後」「時間的持続」「時間的間合い」として対自化されうるということ、このことを銘記しうれば足る。」245P・・・

「時間的先後」「時間的持続」「時間的間合い」

「・・・・・・・・先後関係と同時関係とは、——それが概念的に措定されるのはいずれにせよ反省を介してであるけれども——先後の覚知のほうが先行的・直接的であり、同時関係というのはさらなる被媒介性において対自化される間接的な所知であると言わねばなるまい。二つの与件の同時的覚知ということ、両者のあいだに先後関係の直接的覚識が認められないという否定的媒介を経てはじめて対自的に措定されることであって、直接的な反省において対自化されうる先後関係とは位階を異にする。／こうして、知覚的現在、反省的に措定される“瞬間的同時位相”ではなくして、反省的に対自化すれば異時にわたる間合いなし持続を懐胎している。そして、この知覚的現在という時間帯(持続)の内部における限定としてのみ、はじめて、反省的同時性(従ってまた厳格な意味での「今」)が措定されうるという事情にある。(旧来の哲学的時間論は往々「今」「瞬間」「同時」から出発しようとして諸々のアポリアに陥っているが、それはそもそも体験的時間の実情に合わない)。」246P・・・異化が同一性より先行するということと同じ内容をもっていること。異化の構造をとらえることが重要。

[二]

(この項の問題設定)「知覚的現在の意識野、剝切、フェノメナルな現在の世界の内部において、われわれは各種の運動・変化——その或るものは明らかにゲシュタルト的完結性をもって現われる——を覚知する。ここでは知覚的に認知される変化を「生滅」「変様」「移動」という三つの類型に分けて、知覚的空間(実は「時空間」)との関わり具合を内省しつつ、記憶的時空間、知覚的=現在の時空間、予期的時空間の位相を一瞥しておこう。」246P・・・

「ここでは知覚的に認知される変化を「生滅」「変様」「移動」という三つの類型」

「われわれは、以上、運動性知覚ゲシュタルトと知覚的=現在の空間世界との関係、ならびに、それと記憶的空間世界との関係、これらの一端を検覈してきた。今や、予期的空間世界に關説すべき次序であるが、上述のところとパラレルに、ここでは次のように臆言するにとどめよう。／予料されている事象は、生滅にせよ変様にせよ移動にせよ、それが現在の知覚的空間という静止的な大枠の内部に定位されている場合には、それは別の可能的知覚空間世界を思念せしめることはない。しかるに、当の予期的変化が現在の知覚的空間を超出する場合、ないしは、それが現前的知覚空間世界の大枠そのものを変容せしめる相で予料されている場合には、別の可能的知覚空間が表象される。／予料的表象には、しかし、狭義の予期と夢想などの種別が存在するし、予期そのものの内部に“未来完了”を規定するとき過現未の三時相が存在するといった事情もあり、ここには立入って討究すべき問題点が残されている。」248-9P

[三]

(この項の問題設定)「われわれは前項で「記憶的空間世界」「予期的空間世界」という言葉を唐突に用いたのであったが、これらの概念は明示的に規定し返す必要がある。(遡っていえば、生滅・変様・移動と空間的世界との関係についても、変化という概念およびその様相的種別を“常識的”に先取したかたちになっており、実は再措定を要する)。ここでは、とりあえず意識主体、さしあたっては身体的自我の脱自的な自己分裂的自己統一という事態を勘考しつつ(この問題については別著『世界の共同主観的存在構造』第二部第一章を参照されたい)、フェノメナルな時空間の存在現相を追認しておこう。」 249P

「知覚的=現在の意識空間が時間的奥行きをもっていることは上述しておいたが、この時空間はさながらアインシュタインの相対論的時空間のごとき内的統一性をもっており、あまつさえ、それは身体的自我を輻輳点とするパースペクティブな構造をそなえている。覚知される空間的・時間的な“大きさ”がそれを充たす事象の“質・量”によって制約されることはあらためて指摘するまでもあるまい。ここで特筆しておきたいのは、空間規定と時間規定との相互的な制約性である。一直線上に等間隔に並んだ光点を順次に点滅していくとき、点滅の時間間隔を不等にすると、物理的距離は等しいにもかかわらず、時間間隔の大きい二光点間の方が、距離が大きく感じられる(タウ効果)。又、直線上の光点を不等間隔にしておき、同じ時間的間合いで順次に点滅していくと、物理的には同じ時間間隔であるにもかかわらず、空間的に距離の大きな二光点の継起の方が時間的間合いが長かったように感じられる(エス効果)。このような実験事実からも明らかのように、空間的知覚と時間的知覚とは相互に独立ではなく、両者は相互制約的であって、要言すれば、現在の知覚世界は四次元連続体的な(?)時空間系をなしている。そしてこの知覚的な時空間系が「身体的自我」に定位されているわけである。(けだし本稿において、時間形象をつねに空間形象との関連相で論考する所以でもある)。／偕、われわれは知覚と“想像的”ないし“記憶的”な表象とを即自的に区別して意識する。もちろん、反省してみれば、幻影であったことに気づくというような場合もあるが、その都度の意識において、知覚と表象とを反省以前の・即自的に弁別しているのが常態である。ところで、「表象」の属する“時空間系”は一義的ではない。これは過現未の世界の分局化ならびに時間意識の形象化の機制において枢要な契機をなすと思われるので、若干の分析を試みておきたい。」 249-50P

「・・・・・・ところが、夢をみている真最中や夢想的状態(それが回想であれ予期的想像であれ)にあっては、現在の意識野の輻輳点たる「私」の意識が全く欠落してしまい。そこには「私」が現われるにしても、それは夢の世界や想像的世界の登場人物としての私だけであって、かの自己分析的二肢統一が存在しない。従って、そこでは、表象的世界(夢の世界、白日夢的な想像の世界)があたかも知覚的空間世界(ここでは「私」の二重性が見られないのが常態)であるかのごとき相貌で現識されることになる。そして、夢からさめるという事態、すなわち、「私」の自己分裂的自己統一を現出せしめつつ知覚的世界と表象的世界との区別的分節が現前化するという事態において、フェノメナルな世界の時空間的な再統一がもたらされる次第である。／この間の機制をも勘案しつつ、今や、過現未の世界の分立、その存立構造を討究すべき段取りである。因みに、嚮に論考してきた「記憶的に表象される時空間的世界」、「予期的に表象される時空間的世界」なるものは、決してそのまま「過去的世界」「未来的世界」と合致するものではない。このことは、いわゆる歴史的過去の世

界、例えば古代世界が「過去の世界」であっても、私の記憶的世界ではないという一事を慮みれば明らかであろう。過現未の世界、ひいては、過現未という時間の三時相を概念的に把握(「ベグライフェン」のルビ)するためには、身体的自我の「脱自的な」自己分裂的な二肢的統一性という域を超えて、時間形象の共同主観的な存在構造視軸を転じなければならない。」253-4P

第三節 時間形象の对象的存立

(この節の問題設定)「われわれは前節において、いわゆる体験的時間に止目することを通じて、時間意識の様態を知覚的ならびに表象的なフェノメノンの編制に即して摘録し、身体的自我の自己分裂的自己統一の問題にまでふれておいた。そこでは、しかし、時間的規定性はいわゆるメロディーを典型とするとき“時間的ゲシュタルト”の契機として扱われているにすぎず、「先後」「持続」「間合い」ひいては「同時性」や「連続性」、さらにまた「過去・現在・未来」の時相、等々、共同主観的に存在する「時間形象」の諸規定を概念的に把握(「ベグライフェン」のルビ)する作業が“遺贈”の案件になっている。本節では、第一節で予備的に挙げておいた時間観念の類型をも射程に収め、第二節で対自化した論点を踏んで時間形象の物象化的錯視を卻けつつ、われわれなりの視座から、時間形象の对象的存立構造を考覈しておこう。」254P・・・時間形象の物象化——共同主観的存在構造

[一]

(この項の問題設定)「時間形象について十全に論考するためには、肢体的分節体ならびに物体的分節体の“実体的持続性”に關説する必要がある。ここでは、しかし、そこまで立入ることは割愛して、時間の感性的対象性という次元から議論を始めることにしたい。」255P
「爰に、空間的延長性や形や色といったものの“感覚”が存在すると認められうるかきり、われわれはそれと同等の権利において時間(先後・持続・間合)の感覚が存在する旨を主張することができる。(“同時”や“今”ということは、前節で述べた通り、直接的な感覚ではない)。この際、しかし、われわれとしては要素主義的な感覚説を採る必要はないし、また、いわゆる素朴実在論の流儀で“感覚”にはそれに対応する原像的对象性が“実在”すると強弁する者ではない。さしあたって立言しているのは、このような物性化的錯視とは無縁な次元で、“時間感覚”なるものの存在が“空間感覚”の存在と同等の資格で認められうるということまでである。(なるほど、時間は、空間形象や音などとは異って、それを感受する特定の感覚器官との対応性をもたないかもしれない。しかし、この点では、いわゆる「有機感覚」も同断であり、このことを以って時間感覚の存在を否認することはできない筈である。)」256P

「ここで、時間の形象化のインプリゲーション(履行)として銘記しておきたいのは、それが、例えばメロディーの長さといった個別的な事象の規定性という埒を超えて、「時間」そのものという相で对象的に定在化されるという事実である。その機縁としては諸多の契機が考えられうるが、特に留意すべきは、周期性運動(昼夜の交替、四季の循環といったことだけでなく、歩行運動のリズムといったものをも含む)における反復的再認の意識、および、予期的現認の意識である。周期性運動においては予期的現認が再認と二重写しになるわけであるが、反復的に再認、ないし、予期的に現認される“対象”は一般に“客観的に実在しているもの”、しかも“実体的に存続するもの”という存在様相で了解される。周期性運動

が時間の形象化どころか時間の代象として歴史的に存立したのは、おそらく右の機制が介入することによってであろう。」 256-7P・・・運動から時間概念

「この際、併せて記しておけば、時間の代象は、日常的意識態においては常に「運動」であるとみなして大過ないと思われる。慥かに、近代人はそれを直線という空間的形象で象しているかのように私念しているが、既述の通り、それは流線的な直線運動ではあっても、決して静止的な直線という空間的定在ではない。遊牧民一般の日常的意識にあっても、時間が静止的な路線で代象されているとは考え難い。——運動の典型(“完全な運動”)が天体の円周運動であった古代ギリシャにおいては「時間」は円運動で代象され、等速直線運動が特権的な運動とみなされる近代においては「時間」は直線運動で代象される所以となる。」 257P

「ところで、時間なるものが対象的定在として思念され、「運動」で代象されるとしても、そこから直ちに過現未という時間が措定されるわけではない。それでは、過去・現在・未来にわたって存続ないし流過する時間という形象化がいかなる機制において存立するのであるか？」 257P

〔二〕

(この項の問題設定)「一口に過現未の時相といっても、循環的時間観念の場合と直進的時間観念の場合とでは了解内容が異ってくるし、靈魂の不滅を認める文化とそれを認めない文化とでは「過去的世界」「未来的世界」の了解内実がおよそ相隔ったものになる。このことを念頭に収めつつも、ここでは一般的構図ないし論理構成に限って論じておこう。」 257P

「過去的世界・未来的世界ということは、先にも断っておいた通り、記憶的世界・予期的世界ということとは同値ではない。しかし、われわれとしては、記憶的・予期的な世界を媒介環として時間なるものの形象化にアプローチすることができる。」 257-8P

「われわれは前節〔三〕において、知覚と表象とは即自的に弁別して覚識されるという内省的事実¹に立脚しつつ、「表象的世界」が知覚的=現在の空間世界に内属するという事情にふれておいた。表象的世界は固有の時空的体系を含意しているといっても表象的与件そのものはあくまで現在の意識野に属している。このかぎりでは、表象的世界は、それが記憶的であれ予期的であれ、表象としては現在のにある。／ここにおいて、われわれがもし、もっぱらレアルな与件に留目するのであれば、記憶的世界といひ予期的世界といひても、それは所詮、現在表象されてある表象体系にすぎないということになる。この見地に徹するとき、いわゆるアウグスティヌス式の“現在主義”を執る所以となる。／しかしながら、「記憶的世界」「予期的世界」というものは、決して如上の心理的・現在の表象体系に尽きるものではない。／われわれの意識する「記憶的世界」「予期的世界」は、単なる「再認の覚識を伴っている表象体系」「期待の覚識を伴っている表象体系」ではなく、明らかに、それ以上の或るもの、*etwas Mehr*、単なるそれ以外の或るもの *etwas Anderes* である。……………当の *etwas Mehr* が *intersubjektiv*(共同主観的=間主観的)に *gültig*(妥当)だと判断されるとき、わたしは“認識論的主観”としての資格を僭称しつつ、それを「在る」ものと了解する。(この間の機制については詳論の紙幅を欠くので、別著『世界の共同主観的存在構造』第一部を参看されたい。)」 258-9P

「記憶的世界ならびに予期的世界は、この機制に俟つことによって、心理的レアルには

再認の意識・期待の覚識を伴って表象されているにとどまるとしても、意味的所知性においては、固有の对象的存立性をもつ或るものとして現識される。そして、当の表象的世界が知覚的＝現在の空間世界に内属しつつ、かの身体的自我の自己分裂的自己同一性を現識せしめる。／ここにおいて、身体的自我を二重性において現前せしめる二つの世界(記憶的空間世界と知覚的＝現在の空間世界、または、予期的空間世界と知覚的＝現在の空間世界)の関連づけをめぐって、幾通りかの反省的知見が分立する所以となる。」259P——小さいポイントで詳述

「主題的な検討に値するのは、世界現相が「変様」という様式で変化することを了解しつつ、そこに移動的契機と非移動的契機とを措定する諸類型である。われわれとしては、表象的空間世界(記憶的または予期的世界)と知覚的＝現在の世界との二肢的二重相で自己分裂的自己統一的に現われる身体的自我の変様の移動に留目しつつ、まず、この身体的自我が不動的に止住する場合と、それ自身が移動的に遷移する場合とに分け、それぞれのケースに対して、世界の移動的・非移動的な変様を対応づけて分類してみよう。」260P——(1)身体的自我そのものは止住しつつ、世界が移動的に変容する場合。(「狩猟民型」)、(2)身体的自我そのものは止住、世界も非移動的に変様する場合。(「農耕民型」)、(3)身体的自我そのものは移動するとはいえ世界もまた一緒に移動的に変様する場合。(「遊牧民型」)、(4)身体的自我は移動的に運動するが、世界そのものは移動しない場合。(「旅商人型」)。260P

「(・・・・・・われわれの看ずるところ、知覚的・心理的現在の内部に過現未の時相的分化が生ずるのは「身体的自我」の自己分裂的自己統一を一要件とする被媒介的な後件としてである。因みに、フッサールの時間論があのような結果に終らざるをえなかったのは、彼は折角「意識全体の瞬間性のドグマ」を批判しておりながら、知覚的現在内部での過現未的分化という発想を採っていること、ここに淵源があるように見受けられる)。」262P

「ここにおいて、時間なるものがあたかも「今」という瞬間的現在の継起的持続であるかのように私念される傾向を生み、あまつさえ、そのような「今」の遷移としての過現未的時間なるものが措定され、それが物象化的に錯視される所以の、誤った論理構制が立てられることになる。・・・・・・」262・3P

[三]

(この項の問題設定)「時間なるものが一たん共同主観的な形象(「ゲビルデ」のルビ)として対象化され、それが過現未を通じて定在する或るものとみなされると、主宰的な過客とされるにせよ、路線的ないし流線的に表象されるにせよ、「時間」は一種の形而上学的な実在であるがごとき存在性格を呈することになる。(その場合には、また、論理的に推していくと時間表象は一種のアプリオリということにならざるをえなくなる)。われわれはこの物象化の秘密を対自化しつつ、時間という形象の存立実態を見据えておかねばならない。」

263P

「時間・空間なるものがそれ自体として客観的に実在するという物象化的錯認は、きわめて根深いドグマ(臆見)であり、これを卸けるのは容易ではない。たしかに、時刻(時点)にせよ時間(持続)にせよ、既成の時間体系の布置・延長に関係づけることによってはじめて現実的な意味をもちうる。このかぎりでは、時間的的定位・限定は、論理的には、当の定位・限定の基体を先件として要求する。だが、このことは、この基体的時間なるものが存在的(「オ

ンティッシュ」のルビ)に先在するということを意味しない。」 263-4P

「・・・・・・同様に、例えば、メロディー的ゲシュタルトその他、運動性・変化性の与件を先後・持続といった意味の所知性において把握する過程、そのような意味の所知の共同主観的な形象化という事態が進捗し、そこにおいてはじめて時間体系なるものが存立するにいたる。数体系があってはじめて2個のリングが存在するのではないのと類比的に、時間なるものがあってはじめてメロディー的变化や運動が存在するのではない。逆である。運動・変化する世界現相のほうが原基的存在である。」 264P

「近代人は、絶対的空間、絶対時間なるものが在って、そこではじめて運動ということも存在しうると考えてきた。このドグマからするとき、運動・変化(いわゆる運動性ゲシュタルトといった具体的定在であって、もちろん、概念としての運動や変化ではない)こそが原基的存在であるというわれわれの主張は、なるほど奇異に思えるであろう。しかし、アインシュタインの相対性理論をまつまでもなく、時間・空間・質量等々は相互制約的な有機的聯関態をなしており、現代物理学的に言っても、時間は空間や質量から独立に存在するものではない。しかるに、時間・空間・質量が聯関態においてのみ存在するということは、視角を変えていえば、運動態のみが存立するということの意味している。——時間や空間といった規定性は、この原基的存在たるモメンテを悟性的に抽象し、それを運動なるものの先行的存在条件とみなしつつ宛かも自存的な存在であるかのように扱ったものにすぎない。——翻って思うに、われわれの体験的時間は、まさにそのような聯関態において存在する。このことは、前節 [三] において「タウ効果」や「エス効果」などを挙げて既に指摘しておいたところである。」 265P

「もはやこれ以上喋々するには及ぶまい。過現未にわたって既在する時間なるものがあるからこそ、運動・変化(の知覚)もはじめて存在しうるといふがごときは、悟性的抽象に立脚した物象化的倒錯にほかならない。現実的・第一次的に存在するのは運動態 als solche(そのもの)である。(万物は流転す(「パンタ・レイ」のルビ)。空間・時間があってそこに万物が宿るのではない。流転する万物[運動の相での世界]が原本的に存在するのである)。」

265-6P

「このように記すとき「それでは現在主義に陥りはしないか」との疑念を生ずるかもしれない。だが、上述しておいたように、記憶的世界・予期的世界は、所与表象そのものは現在のであっても、意味の所知性においてはレアル現在の表象ではなく、etwas Mehr, etwas Anderes である。例えば、私の少年時代の頭蓋骨があったということ、この「あった」という過去性の「ある」は、私が現在そのことを記憶的に表象しているという謂いではない。それが共同主観的に認証されるかぎり、この「あった」という「ある」は、まさに“客観的事実”なのである。尤もこの場合、われわれは一種の間主体的妥当性と客観妥当性とを Wechselbegriff (入れ替え把握)にしているのであって、このことの存在論的・認識論的な権利づけを要する。」 266P

(編集後記)

◆なんとか、ペースをつかみかけているのですが、一方でまた読書メモが溜まりはじめ、またどうしようかと、考えています。

◆巻頭言は、「愛国心教育」という偏向教育を取り上げました。かつて、日教組を自民党右派は偏向教育として批判していましたが、かれらが取り入れた「愛国心教育」こそが偏向教育なのだとわたしは押さえています。その偏向教育が、若者の政治離れや、エゴイズム、いじめなどをもたらしたのだと。

◆読書メモは[廣松ノート(3)]の『事的世界観への前哨』に入ります。この編集をしている次点で、次の[廣松ノート(4)]の『もの・こと・ことば』を丁度終えたところ、どんどん溜まってきています。また、月二発刊にしないといけないのかなと思ったりしています。

◆[廣松ノート]は、今回入った『事的世界観への前哨』の後に、『物象化論の構図』を入れるはずでした。ただ、『世界の共同主観的存在構造』を読んでいるときに、その著と『もの・こと・ことば』がリンクしていると感じました。実際、『廣松渉著作集』では、第一巻で『世界の共同主観的存在構造』と一緒に『もの・こと・ことば』が収められています。で、これを先に読むことにしました。で、ノート作成中に、わたしが廣松さんのマルクスを經由したヘーゲルの für es (当事者意識) と für uns (第三者・学的意識) の弁証法を逆に取り違えていることに気付きました。厳密に言う、もう一段「観照的意識」としての für uns ということを、für es の前に措いていたのですが、その取り違えがどこで起きてきたのかを、早急につかんでおきたいということで、『弁証法の論理』を先に、すなわち、『もの・こと・ことば』の後に読みます。それは、「まずは」として進めている廣松認識論の幹の学習としても、『弁証法の論理』は『著作集』の第三巻に収められていて、剝切ではないかと思えます。

わたしが、『物象化論の構図』を早く読みたいというのは、わたしの反差別論のキー概念が「物象化論」だということから来ています。ここを押さえて、中断している宿題の作業を再開していきたいとの思い故です。勿論、余命宣告などされたら、学習は投げ出しても宿題に没入していくしかないのですが。

◆もう、世界がむちゃくちゃになってきています。イスラエルは差別されてきた「ユダヤ民族」が、差別構造そのものを解体しようという反差別の立場に立つのではなく、差別する側になって、日本が「満州国建設」という形での植民地支配に入ってしまったことと同じことをやっています。そこでの絶望に駆られたパレスチナの反作用としての攻撃が起きているのです。国家という共同幻想にどうしてとらわれていくのか、そこから問題にしていけないと、解決の途はないのです。過去に日本が植民地支配に入ったとき、制裁に入ったアメリカが、なぜ、イスラエル支持ができるのか、分かりません。そもそも、アメリカは民主主義という仮面をかぶって、第二次大戦後数々の侵略を繰り返してきた国です。他の国を「悪の枢軸」とか批判したりしていますが、それならば、アメリカは「悪の権化」です。そんな国と軍事同盟を結び、属国化していること自体が信じられないのです。巻頭言の、国家主義批判とリンクしていきます。

マスコミは、日本政府がアメリカの属国化していく中で、きちんとした報道をしなくなっています(これについては、次々回の巻頭言で取り上げます)。それで、最近インターネット

ットの情報番組を観るようになってきているのですが、今回、イスラエルのパレスチナへの植民地支配と抑圧を、イスラエルの少女が「わたしのおじいちゃんは、こんなことをするためにホロコーストを生きのびたのではない」というプラカードをかかげていた、という話をキャスターがしていました。得てして宗教戦争のようにとらえがちですが、必ずしも、そうでなく、イスラエルにもシオニズムに反対するひとがいます。ただ、今回の件で、それらのひとが、アメリカの9・11直後のように愛国心支配のように抑圧されるのではとも思うのです。国民国家の論理——国家主義批判と反差別——コロニアリズム批判ということを書き立てなければなりません。

◆わたしの宿題のひとつは、「社会変革への途」で、その中で、社会変革運動、すなわち左翼的な運動への総括のようなことも考えているのですが、その一方で、ポピュリズム的な右派勢力が増えているなかで、ちゃんとした右翼がいなくなったと感じています。昔は、民族派といわれる反米右翼がいて、その観点から政府批判をしていたのですが、すっかり政府の御用化してしまっています。最近、わたしの中の右翼性というようなことを感じています。わたしは、自分の活動のエネルギーを「吃音者としての怨念」というようなことを言っていたのですが、まさに、そのような怨念のようなことは、右翼的なエネルギーではないかなどと考え始めました。次々回で、アメリカの属国化している日本批判のようなことを書くつもりなのですが、ちょっと躊躇しています。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出ししていく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのことともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということを書き概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>